Facebook 投稿紹介

あべちゃんの「映画評論日記」

『レイニーデイ・イン・ニューヨーク』　『The Holiday』
『My Fair Lady』　『Paris when it sizzles』（＝「パリで一緒に」）

阿部正巳

『レイニーデイ・イン・ニューヨーク』

2022年2月10日

アメリカ映画　2019年　ウッディ・アレン監督　男子大学生のギャツビーはギャンブル好きで、ポーカーで稼いだお金で彼女をデートに誘う。新聞部所属の女子大学生アシュレはギャツビーとデートの約束をするが、映画監督やハリウッドの映画スターに取材していく中に誘惑され、デートが遅れていく。

やがて現実を知り、逃げ帰る。一方、ギャツビーは暇な時間ができ、映画のエキストラをしたり、ポーカーをする。アシュレは映画スターと同行し、パパラッチに遭い、テレビで放映される。ギャツビーはその様子をテレビで知る。

ギャツビーは自暴自棄になり、酒におぼれ、年上の女性に誘惑される。二人とも大人の世界に絶望を感じるが、お互いに成長していく。

ウッディ・アレンの映画はドタバタ喜劇の中にも、文学や映画や芸術がちりばめられており、シナリオの奥行きが深い。雨のニューヨークの景色もとてもよく似合う。ジャズピアノの物悲しい弾き語りも叙情的でいい。

「レイニーデイ・イン・ニューヨーク」
予告編リンク
https://longride.jp/rdiny/

『The Holiday』

2021年1月18日

キャリアウーマンのロンドン在住とロサンゼルス在住の失恋した独身女性が、ネットでお互い2週間の自宅交換(ホーム・エクスチェンジ)をし、新しい出会いが生まれる。

発想が奇想天外だが、人生について熱く語っているような気がする。かつてハリウッド映画の脚本家で活躍した90歳の老人が女性に語っている言葉が実にいい。

コロナ禍です。じっくりステイホームでAmazon プライムビデオでも観ましょう。

「映画には主演女優とその親友が登場する。君は主演女優だ。なのに親友を演じている。」
"In the movie, We have a leading lady. Every have a best friend. I can tell you a leading lady. Some reason behaving a best friend."

『My Fair Lady』

2020年9月30日

舞鶴はよく雨が降ります。「弁当忘れても傘忘れるな」ということわざがあるくらいです。さて、「The rain in Spain」という歌があります。「The Rain in Spain Stays mainly in the Plain」「スペインの雨　主に平野に降り注ぐ」という意味になります。オードリーヘップバーン主演の『My Fair Lady』に出てくる歌です。なんの変哲もない詩ですが、英語の発音の【ein】が続き、発音の練習になります。映画の中で主人公のオードリーヘップバ

ーンが発音の特訓を受けているシーンです。音声学の教授（レックスハリソン）がなまりのある田舎者の花売娘（オードリーヘップバーン）に正しい英語を教え、教養とマナーのあるレディに成長させ、社交界にデビューする映画です。競争社会の昨今において、弱者を救い上げる映画を観ていると、何か温かい気持ちになるのは私だけでしょうか。

『Paris when it sizzles』

（＝「パリで一緒に」）

2020年9月25日

地元、舞鶴には GEO という DVD 映画のレンタルショップがあり、旧作は2週間110円でレンタルできます。ずいぶん安いレジャーです（笑）。

さて、今回の映画は「Paris when it sizzles」です。邦題は「パリで一緒に」sizzle は英和辞典で「ジュージューと音がする」の意味です。「パリでジュージューと音がする」ではまったく意味が分かりません。sizzle はスラングで hot（刺激的な）という意味だそうです。つまり「パリでホットに」ですね。

1963年に上映されたオードリーヘップバーン主演のアメリカ映画ですが、時代を感じさせないハラハラドキドキの映画です。もちろんカラー映画です。今回、英語字幕で観てみました。

字幕は日本語と英語が選択できます。ストーリーは売れない映画脚本家（ウイリアムホールデン）がパリのホテルに滞在し、映画のシナリオを書くのですが、書けたのは映画のタイトルだけ。タイトルは「The girl who stole the Eiffel Tower」で和訳すると「エッフェル塔を盗んだ女」これも意味不明です。

女性タイピスト（オードリーヘップバーン）を雇い、彼女を主演に映画のシナリオが進行します。結末は映画を観てのお楽しみです。会話の中で「Absolutely ape!」が出てきます。和訳すると「全く大きなサル」で、これも意味不明です。ape は英和辞典では「大きなサル」ですが、スラングでは「mad（狂っている）だそうです。

「全く狂っている！」か？スラングが分からなければ、映画が分かりません。しかも、スラングは英語の教科書にも出てきません。でもアメリカ映画を英語の字幕で観ると、英語の勉強になりますよ。

Holden and Miss Hepburn could not help being engaging, and they certainly are that in "Paris When it Sizzles." ホールデンとヘップバーンは魅惑的にならずにいられなかった。そしてふたりはパリですごくホットだ。

※阿部正巳さんはFacebookに色々な投稿をされています。ここでは『映画評論日記』を紹介しました。「My Fair Lady」はじめオードリー・ヘプバーンの映画は皆さんもたくさんご覧になっているでしょう。私は学生時代、学習塾で英語を教えたとき、阿部さんが触れている「「The Rain in Spain Stays mainly in the Plain」を、イギリスの低層社会の「コクニー英語」の説明でよく紹介しました。今でも BBC のインタビューを視聴していると「パイパー」「パイパー」というのが「ペイパー＝paper=紙」のことだと少し間をおいて理解することがあります。それでも、アメリカの英語よりはるかに分かりやすいですが。

「My Fair Lady」のその場面は YouTube で視聴できます。リンクは https://www.youtube.com/watch?v=xmADMB2utAo　です。

ミュージカル映画ですので、ヘップバーンの歌声が素晴らしい。ドラマでは貧困階層のコクニー訛りを克服して舞踏会で大成功を収めた後のエピソードが印象に残ります。ヒギンズ教授とピカリング大佐はそれを成し遂げたのがイライザであるのに、自らの大成功に有頂天となる。置き去りにされたイライザの怒りに「男支配の社会」への風刺を読み込むのは私だけでしょうか。もちろん、最後はラブロマンスで終わるのですが。（田中均）